2019年４月７日（日）「言葉の管理者」

マタイ 23:16-22

16 わざわいだ。目の見えぬ手引きども。おまえたちは言う。『だれでも、神殿をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、神殿の黄金をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』17 愚かで、目の見えぬ者たち。黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか。

18 また、言う。『だれでも、祭壇をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、祭壇の上の供え物をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』19 目の見えぬ者たち。供え物と、その供え物を聖いものにする祭壇と、どちらがたいせつなのか。 20 だから、祭壇をさして誓う者は、祭壇をも、その上のすべての物をもさして誓っているのです。

21 また、神殿をさして誓う者は、神殿をも、その中に住まわれる方をもさして誓っているのです。 22 天をさして誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方をさして誓うのです。

【序論】

人間には、他の動植物には与えられていない様々な能力があります。聖書的に言うならば、「地を管理するための賜物」です。受洗準備をする子どもたちにも考えてもらうことがありますが、幾つか挙げてみましょう。

例えば、火を扱うことができる。これは「道具を扱うこと」に通ずるかも知れませんが、この能力は部分的に動物にも備わったところがあります。チンパンジーは蟻塚のシロアリを食べるために木の棒を使うといいますし、カラスはハンガーの先を使ってペットボトルの中身を出すとも言われます。しかし、危険な火を有効活用するほどの知恵は人間にしか備わっていないでしょう。

では、宗教や哲学を持つことはどうか。これこそは恐らく、人間固有の特性でしょう。見えない存在との交わりを持つ。神の存在を信じ、真理とは何であるかを考え、死とどうにか向き合おうとする。この点において、人間は他の動植物と一線を画すでしょう。

では、「言葉を使うこと」はどうか。これにはやや異論があるかも知れません。他の動物の優れたコミュニケーション手段、例えば鳴き声や、イルカが発する超音波的な信号も違った形での「言葉」であるからです。しかし、論理立てて言葉を組み立て、文字に書き記すとなると、恐らくこの地上では人間にしかできないことであります。そして、そのネガティヴな面として、嘘をつくこと。これもまた人間だけがやることですが、「罪」という宗教的な概念と「言葉」が結びついたところに現れてくるものでしょう。

【本論】

今日は「言葉」の問題、「誓い」の問題、「嘘」の問題を考えてまいります。人はなぜ嘘をつくのか。なぜ偽りを語るのか。また、なぜ嘘に上塗りし、正当化しようとするのか。私たちの生活に深く結びついた「言葉」を問うてまいりましょう。

本論１．神殿と黄金（16-17 節）

> **わざわいだ。目の見えぬ手引きども。おまえたちは言う。『だれでも、神殿をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、神殿の黄金をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』愚かで、目の見えぬ者たち。黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか。**（23:16-17）

７つの「わざわい」の第三。主イエスはパリサイ人・律法学者が教える「誓い」の問題を取り上げます。彼らが民衆に教えていたこととは、神に対して誓いを立てるとき、誓う対象によって免除され得るものとされ得ないものとに区別されるということです。具体的には、誓った対象が神殿（程度）であれば、仮にその誓いを破ったとしても神からの罰は受けない。ここで使われている「神殿」（ναός）という言葉は、聖所の建物を意味し、大きな神殿の中の特別な場所のことを言います。恐らく「黄金」とは聖所内に据えられた金製品の器や道具のことで、それは特に重要視されていたのでしょう。すると、彼らの理屈によれば、それほど重要な物を指して誓った場合は、もしその誓いを破ったら神罰が下るということになるのです。

主イエスは彼らのこの論理に真っ向から反対します。「**目の見えぬ手引き**」「**愚かで、目の見えぬ者たち**」という激しい糾弾。ここには、「お前たちは神の御心を何も分かっていない」という怒り、嘆き、悲しみがあります。主イエスはイスラエルに律法をお与えになった神ご自身であり、神の御前における「誓い」の厳粛な意味を誰よりもご存知でした。そもそも、「誓い」にまつわる戒めは何のために用意されたのか。それは、「偽る」という人間の傾向に手綱をつけるためです。人間は放っておけば互いに嘘をつき合い、事実に反することを口にする。神の民の間でさえそのようなことが平気で行なわれていた。このような状況を憂え、神の民とは真実のみを語り、行なうことで、真実なる神を証しする民族でなくてはなりませんから、神はモーセを通して戒めをお与えになったのです。

- **あなたがたは、わたしの名によって、偽って誓ってはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。わたしは主である。**（レビ 19:12）

・ **人がもし、主に誓願をし、あるいは、物断ちをしようと誓いをするなら、そのことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。**

（民数 30:2）

・ **あなたの神、主に誓願をするとき、それを遅れずに果たさなければならない。あなたの神、主は、必ずあなたにそれを求め、あなたの罪とされるからである。もし誓願をやめるなら、罪にはならない。あなたのくちびるから出たことを守り、あなたの口で約束して、自分から進んであなたの神、主に誓願したとおりに行わなければならない。**（申命 23:21-23）

この三つ目の戒めの中に「誓願をやめる」という選択肢が用意されています。このところから、律法学者は「誓願をやめられるケース」を色々と考え出したのです。神の本来の目的は、誓いは立てられたなら必ず果たされなければならない。果たせないような誓いは立ててはいけません。しかし、それでも一たび立てた誓いによって、現実が縛られ、どうにも物事が回らなくなってしまうような状況のために（民数 30:3-15）、例外的に誓いを解く「憐れみ」の道が備えられたのです。ところが、人間はそれを「誓いの積極的な抜け道」とし、前提条件のようにあれこれ考え始めた。こうなってしまいますと、「誓いは必ず果たせ」という律法の本来の目的は失われるでしょう。

これは、私たちの問題でもある。私たちは日常生活の中で色々と約束をする状況があります。結婚の誓い、子どもとの約束、社交辞令的な友人や同僚との約束。どんなに小さな約束事であっても、それは果たされなくてはならないと主イエスは言われます。言葉にはそれほどの重みがある。すべての言葉は神の御前で発せられていることを忘れてはならない。「**黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか**」。答えは神殿です。神殿とは、神の臨在される場所。つまり、いずれも神の御前で語っているということになるのです。政治家が口にする嘘は公に追求されます。確かに彼らにはそれだけの責任があるでしょう。では、私たちの日常会話における偽りはそれとは別なのか。そうではない。一つ一つの言葉に重みがあり、その一切が神に聞かれているのです。

本論２．祭壇と供物（18-20 節）

また、言う。『だれでも、祭壇をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、祭壇の上の供え物をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』目の見えぬ者たち。供え物と、その供え物を聖いものにする祭壇と、どちらがたいせつなのか。だから、祭壇をさして誓う者は、祭壇をも、その上のすべての物をもさして誓っているのです。（23:18-20）

論理は同じことです。ここでは「祭壇」と「祭壇の上の供物」が誓いの保証とされているのですが、律法学者は祭壇を軽く見て、供物を重要視しているのです。これは屁理屈

であって、誓いを果たさなくてもよい道を提供しているに過ぎません。しかし、主イエスは言われます。何にかけて誓おうとも、誓いは神の御前で誓われたものであるから、果たさなくてよい例外などないのだと。どちらが重要かという問いに敢えて答えるならば「祭壇」となりますが、本質はどっちが重くてどっちが軽いかという問題ではありません。今日の箇所は 5:33-37 で学んだ内容と多くの面で被っています。

さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。だから、あなたがたは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。

ここではもっと厳しく「一切誓ってはならない」とまで言われていました。今日の箇所がこれに対して緩められていると理解してはなりません。主イエスはあまりに安易に誓いが立てられ、それが破られていく現実に辟易としておられたのです。人間の言葉は賜物として与えられた。ところが、それを用いる人間が言葉をまことに軽く扱っているからです。

嘘がよくないということは、子どもでも理解できます。恐らく、子どもに一番「罪」を理解させるのに簡単な方法は、嘘を問うことでしょう。なぜなら、子どもも嘘をつくからです。親に、兄弟に、友達に、先生に嘘をつきます。そして、嘘がバレるとそれに上塗りしてごまかそうとします。そのようにして、真実は虚偽のベールで何重にも覆われていくのです。しかし、多くの場合、真実は透けて見えています。透けて見える真実を問うために周囲の人間は様々な証拠を並べて問い質すのです。

大人の世界では、これと同じことがもっと陰湿な形で行なわれています。機密文書が改竄され、元々あった文書は焼却され、そんなことはなかったと言われる。その嘘によって、ある人が傷つき、ある人が自殺に追いやられる。真実を追求するために無駄な時間とお金が費やされる。もしすべての人間が真実だけを語ったとしたら、世界はまるで違うものとなっているでしょう。しかし、罪ある人間によって形成されている社会は、虚偽に満ちているのです。それだからこそ、神の民の役割は重要なのではありませんか。神の民が真実を語らなくなったら、地の塩、世の光としての役割をどうして果たせるでしょうか。

本論３．神の御前で（21-22 節）

また、神殿をさして誓う者は、神殿をも、その中に住まわれる方をもさして誓っているのです。天をさして誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方をさして誓うのです。

（23:21-22）

もう敢えて説明は必要ないと思いますが、念のため。神殿を軽く見ている人は、そこが神の臨在の場所であることを弁（わきま）えなくてはならない。「天」もまた「神の御座」である。何を指して誓おうが、誓いとは神の御前でなされているものなのだ。そして、律法の全体が神と人とを愛することに集約されるのであれば、私たちは人の前で誓ったこともちろん果たさなくてはならないのです。

ここまで語っておきながら、私は自分の中に多くの偽りが潜んでいることを知っています。自分の心の中のすべてを人に晒すことができるかと問われれば、とても Yes と言うことはできません。まことに恥ずかしい思いで満ちています。今年の年賀状には「短気さん、さようなら」と書きました。私は一見穏やかに見えるそうですが、実は気が短いのです。その姿をそのままは人前で見せていないだけです。また、願わくは言葉において失敗をしたくないと思って生きています。それでもフトしたことで失敗することがあります。群のリーダーに立たされる人はとりわけ言葉の失敗が追求されるでしょう。確かに、救われてからの私は嘘が相当なくなりました。しかし、見えない神に対して嘘をついていないかどうかは常に問われ続けています。私たちがささげている祈りは真実であるか。「祈っています」と言いながら、祈っていないということはないか。歌っている賛美は心からのものであるか。ふざけた歌い方をしてはいないか。使徒信条を唱える時、私たちは習慣的に言葉を並べているだけになってはいないか。その意味を考え、心から告白しているか。キリスト者の真実はそういうところまで問われるのです。

私たちは互いに嘘をついてはいけません。聖霊は「真理の御霊」でありますから、私たちが嘘をつく時に傷つき、悲しまれるのです。この神の前で一切の言葉を発しなくてはなりません。しかし、私たち人間は失敗を免れないのも事実です。過去に、誓ったことを破ってしまったという苦い記憶もあるでしょう。また、最近とっさについた嘘によって、誰かを欺いている状態であったり、自分の首を絞めて苦しんでいるということもあるかも知れません。聖霊はそのような私たちの状態を決して喜んではおられないのです。では、私たちはどうすればよいのか。まず、すべてを知られる神の御前に罪を言い表しましょう。そして、隣人に対しても偽りのベールを一枚一枚剥がしていきたい。たとえ責められたとしても、闇が闇であり続けるよりはずっと良いのです。

明らかにされたものはみな、光だからです。（エペソ 5:14）

【結論】

私自身も闇を抱えて生まれてきました。そして、例外なく、幼少の頃から嘘を語り始めました。言葉という賜物を神は与えてくださったのに、それを正しく用いることができなかったのです。しかし、イエス・キリストと出会ったことによって、真理の御霊がわが内に住まわれるようになりました。この方を悲しませると良心が痛むようになりました。夫婦の間でもそうです。妻に対して一つも偽りを語らないように気をつけています。

私たちは地の塩、世の光です。神の御霊が一人一人の内に宿っていることを忘れないようにしましょう。そして、「言葉」という賜物をいただいた者として、どんなに小さな言葉も神への畏れをもって発する者でありたいと思います。

【祈り】

真理の御霊なる神様。私たちに「言葉」という賜物を与えてくださり、感謝いたします。しかし、人間はその本来善きものである「言葉」でもって罪を犯します。どれほどの虚偽がこの世界を覆っていることでしょうか。真実だけを愛されるあなたは、この世界の現状を見て、どんなに苦しんでおられることでしょう。私たちを光としてくださった主よ。私たちの口から一切の嘘・偽りを取り除けてください。あなたへの畏れをもって、真実だけを語る者とならせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
世を管理するものとして、人間に言葉という賜物を与え給うた、父なる神の愛。
真実が失われた世に、「神のことば」として降り、「地の塩」そのものとなり給うた、主イエス・キリストの恵み。
神への畏れをもって、あらゆる場面で正しい言葉を語らせ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。